

ビバハウス便り No.111 自分達の春を呼び寄せる若者達 2016. 3. 9

ビバハウス責任者 安達 俊子

今年の冬はこれまでに例を見ない暖冬といわれ続けた。ビバハウスの周りをぐるりと見渡してみると確かに雪の量がまるで違う。例年なら、屋根から落ちて積もった雪が、2月には、2階の窓すれすれまでになるのに、今年の雪は、いつもの2分の1だ。さらに驚いた事に、玄関前の花壇では、草花がすでに顔を出している。ビバハウスの建物内では、毎年春一番に花を咲かせるクンシュランがすでに3鉢ほどつぼみを付け、見るたびにその茎をグングン伸ばし、つぼみを大きくしており、雪国・北海道に今までにない早い春の訪れを告げている。

それに引き換え人間界の方は相変わらず、本当の春には程遠い有様としか言い様がない。

福島3. 11からいよいよ5年を迎える！「アンダー コントロール（管理下にある）」（安倍首相）どころか、むしろ危険性はいつそう増大しているニュースばかりだ！今後の放射能含有物の処理方法も全く立っていない中で、「再稼働」のみがあらゆる姑息な手段で狙われているのが現実だ。関連死者3,407名（内閣府調査）を含む2万人以上の死者を出しながら「殺人事件」で殺人罪で逮捕された当事者も監督責任者もない。最近の観光バスの転落事故でさえ、厳しい罰則が即座に適用されているのに比べてもこれは異常である。

ビバの若者達は、この暖冬にも助けられて、例年の雪かきの回数も大幅に減ったため、グループワークに初めて「自由研究」が取り入れられ、それぞれが自分の選んだテーマで学習をし、その成果を全員の前で披露した。なかには「スマートホーン」とはどのようなものかを説明する者（彼はその後見事に自ら志願した国家試験にも合格した）。また自分の生い立ちを振り返り、母親に暴力を振るってしまった過去を涙ながらに訴える若者もいた。彼はビバ生活も長くすでに4年以上になるが、その自己理解の確かさに、今後の成長の可能性を確信した。またある大学休学生は、放送大学教授の宮本みち子先生（先生には、若者自立塾時代に、厚生労働省の専門指導員のお一人として、ビバ若者自立塾運営のうえで貴重なご助言を頂いた事もある。）の著書を自らの問題として読み進み、現在の自らの問題点を導き出し来春からの復学に備えていた。若者達は一人ひとり自らの力で自らの春を呼び寄せている事を実感できる機会だった。

最近引き続いているビバハウスへの相談には、10年～20年にわたる引きこもり、それも完全に両親との関係を断絶しているケースが多く、両親ばかりでなく、叔父さんや叔母さんさらに祖父や祖母の力を借りざるを得ないような困難なケースがほとんどだ。ひきこもり期間が長く年齢もかかってのように10代、20代から、30代中には40代の若者さえも含まれている。ひきこもりの期間が長く、年齢が高いほど解決には時間がかかるのが通例だ。全国からの多様な困難をますます深める相談の事例に触れるごとに、この国の若者たちをとりかこむ状況はますます混迷を深めている気がしてならない。これまでの生活環境を全面的に変えて、若者同士の共同生活の中で、現代の学校や社会に欠落している「人間力」をお互いに高め合う場としてのビバハウスの存在価値がますます求められている。